関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

ジークフリート．J．シュミット テクスト理解 ： テクスト解釈

著者	Siegfried J Schmidt, 杉谷 眞佐子
雑誌名	独逸文学
巻	31
ページ	168-203
発行年	1987-03-25
その他のタイトル	Siegfried J. Schmidt (Siegen), ubersetzt von Masako Sugitani : Texte verstehen—Texte interpretieren
URL	http://hdl.handle.net/10112/6924

ジークフリート・J・シュミット

テクスト理解—テクスト解釈

杉　谷　眞佐子　訳

1. 前書き

1970年代半ばよりテクスト理解の諸問題は，（多くの場合「テクスト処理」という標語で）言語心理学者や心理言語学者の間で中心的なテーマとなった．これらの二つの学問領域は，70年代初頭から研究上の視点が特質に応じて展開していくなかで，多くの利益を得たのである．即ち心理言語学者は言語学のテクスト理論や談話理論への展開から，言語心理学者は心理学における認知的転回と称されているものから．

しかしテクスト理解に関する研究成果は，単に言語学や心理学の分野のみでなく，社会科学的方向を志し，「解釈」を中心課題とせず，一つの興味深い研究対象であるとする文学研究の領域でも次第に注目されてきている．

本論ではテクスト理解の幾つかのモデルを概観し，次に構成主義的文学研究（konstruktivistische Literaturwissenschaft）の立場から，それらのモデルを批判的に検討してみる．

2. テクスト理解のモデル

理解研究に関する最近の諸報告は一致して，新しい出発点として次の3

点を指摘している；(Groeben 1982; Ballstaedt, Schnotz & Tergan; Mandl, Tergan & Ballstaedt 1982; Rumelhart & Norman 1983; Tergan 1984; Hoppe-Graff 1984 etc.)

——経験的な調査情況は，人間の情況に適したやり方で，実態に即したものであるべきだ．
——経験的プロジェクトでは，断片的で無意味な言語資料の代りに，有意味の言語資料が語，文，及びテクストの各レベルで研究されるべきである．
——理解のプロセスにおいて受容者は，(「認知的転回」に至るまでのように）単に受動的な反応機関としてのみ見做されるべきではない．むしろ能動的，構成的或いは，——例えば Hörmann 1976, Bredenkamp & Wittich 1977, Bock 1978 のように——構成的（konstruktiv）な情報処理機関と見做されるべきである．

既にミラー（Miller 1956）は単語リストの学習や保持の際，言語情報が能動的—構成的に記憶されており，単に受動的に取り入れられているのではないことを示していた．続いてブランスフォード(Bransford) とそのグループは，文やテクストの理解が言語学的要素と認知的要素による，構成的な意味上の統合として記述できるということを示す多くの経験的な証明を提出した．（Bransford 1979）・理解の際の「構成性」は就中次の点にみられる．即ち，テクストを読む（処理する）とき，単に「テクスト情報」のみが受け取られるのではない．テクスト情報は，推論のプロセスや——ここ数年言われてきたように——創造的な情報拡大のプロセス（精緻化推論 Elaborationen）により，構成されているのである．

このことは——略式に表現すると——指示意味論 Referenzsemantik の領域にも，また内包意味論 meaning-semantik の領域にも関連している．つまりそこでは，明らかに言語による現実モデルが構成されるなか

で，テクストからの情報が処理されるのみでなく，遙かにその情報を越えた（推論や比較による）操作が生じているのである．これらの調査・実験の結果は次のように要約できよう．先ず理解は知識と共働している．知識はテクスト，及び受容者の記憶の2方向から提供される．認知理論ではそれぞれ，上昇型処理過程（Bottom-up-Prozessen）（テクストから提供される情報に関わるプロセス），及び下降型処理過程（Top-down-Prozessen）（言語情報に刻印されている全ての認知的知識構造に基づくプロセス）として区別している．

知識についての考察は，記憶についての考察に通じる．即ち知識が記憶のなかでどのように組織化され，貯蔵されるか，またそのプロセスは心理言語学上どのようなモデルで形式的に表現可能かという問題に通じるのである．

この問題領域で長い間重要な役割を果たし，最近になって漸く魅力を失うに至った理論に次のものがある．それは，記憶のなかで言語知識は「意味記憶」(semantisches Gedächtnis）の形で表現されると考えるものである．意味記憶は通常，「エピソード記憶」(episodisches Gedächtnis）と称されるものと結合されている．エピソード記憶は，或る情報の「何か」（was）のみでなく，「いつ，どのようにして獲得されたか」(wann und wie erworben）を表現するものである．意味―エピソード記憶は，推論や問題解決及び理解と関わる全てのプロセスの基盤と見做されていた．

このような考察の前提にある記憶モデルは，大きく次の3型に分類されよう．

―「標識モデル」：意味知識は，意味標識のなかに表現されているとするもの（Smith 他1974等）．

―「ネットワークモデル」：（カテゴリー的情報，百科全書的情報等の形

で）意味知識は，リンクや，リンク間の連結を介して組織化されるとするもの（Collins & Quillians 1972, Collins & Loftus 1975参照）.
—「多層モデル」：情報貯蔵を固定したネットワークや標識の結合の形で捉えずに，テクスト情報処理の際「意味痕跡」（semantic traces）が後に残され，それらが処理の集中度に応じて異った「深さ」をもつと考えるもの（Craik & Lockhard 1972参照）.

これらのモデルは全て，情報は，いわば一定量毎に入力された順に単純に貯蔵されていくのではなく，貯蔵の前，或いは貯蔵の際に，認知的に（加工）処理されるという考えから出発している．例えば情報は，上位の，より一般的な構造，及び包含された，より特殊な構造に従い階層的に体系化され，そのような意味的カテゴリーは，さらに検索のための特定の手がかり（cue）を与えられる．それは「再生プロセス」のなかで喚起され，柔軟な処理プロセスの中へと，知識を供給すると考えられるのである．

このようなモデルによるとテクスト理解は，記憶から喚起される認知データを包括しつつ，連鎖的レベルで，テクストの意味的データを組織化していくプロセスとしてモデル化される（Bock 1978参照）．しかしここで問題となることは，そのようなテクストデータ（即ち上昇型プロセスに入っていくもの）は，理論やモデルの中でどのように表現できるかということである．この問題に対し，既に70年代初めから解答を出す試みを行っていたグループが，「命題研究」（Propositionsforschung）の名のもとで作業していた一団で，メイアー（Meyer），ファン・デイク（van Dijk），キンチュ（Kintsch）という研究者の名と深く結び付いている．

彼らの考えを要約してみよう．

私の知る限りファン・デイクが初めて（そして Miller, Galanter & Pribram 1960 の研究成果を受けてではあるが）「表層構造」と「深層構造」というチョムスキーの区別の影響もうけて，次のような仮説を立て

た．即ちテクスト処理において二つの層が想定されなければならない．それは深層構造的なテクスト**ベース**（Textbasis）とテクスト**表層**（Textoberfläche）である．彼によれば，命題及びそれらの相互の関係から成る深層のベースは，「ミクロ命題」に（一般化，選択，統合，削除等の）様様なマクロ化規則が適用され，マクロ命題が形成されることにより生じる．このようなテクスト情報の表現を，認知的な処理部門と結合するためにファン・デイクは，夫々階層的に最高位の命題は，受容者の記憶に最も良く保持されるという（経験的に実証された）仮説で作業している．（このモデルではテクスト生産プロセスが，理論上，テクスト受容プロセスの逆として考えられている）．

van Dijk & Kintsch (1978) によると，マクロ命題のグローバルな組織形態は，スーパー構造と称されるものにより導き出される．スーパー構造は，テクスト処理プロセスが指令を出すや否や，即座に記憶から喚起される．従ってこのスーパー構造は物語文法でいう図式（Schema）と同じ働きをもっているのである．

物語文法(Geschichten-Grammatik)ルーメルハルト(Rumelhart, 1957) の画期的な功績以来ソーンダイク（Thorndyke），マンドラー（Mandler），ジョンソン(Johnson),バウアー(Bower), フリーデリクソン（Frederikson），イェコヴィチュ（Yekovich）等（Hoppe-Graff 1984の論評参照）によって展開され，理解のプロセスにおけるテーマに関するマクロ構造化と，形態的一文体的一構成的次元でのスーパー構造化が，どのように共同作用しているかを経験的に証明しようと試みている．同様な考え方を出発点にし，膨大な量の蓄積された情報がより良く保持，想起され創造的に利用加工されるよう組織化される際の助けとなる，認知的な組織の形態にかんして，多くの経験的研究が実施されている．（＝記憶に貯蔵された適切な知識スキーマの使用に基づきテクスト表現を構成する作業としてのテクスト処理）．

物語文法を展開させようとする試みは，当初から，知識が記憶のなかでいかに組織化され，それが理解モデルのなかでいかに表現されるべきか／されるかという（既に手短かに触れた）問題を抱えていた．この問題解決を試みる過程で，多くの提案がなされた．それらはスキーマやスクリプト(Script)，フレーム（Frame）のような，知識の組織の仕方を表現する諸概念をめぐるものである．

Rumelhart（1977）や Anderson（1978）によると，スキーマは，対象，状況，事件及び行為を，典型的経験に基づき概念的に写し取ったものである（「自動車のスキーマ」或いは「講義のスキーマ」等）．スキーマのおかげで，我々は，或る状況のなかで個々の状況構成素をひとつづつ「処理して片付け」なくても，認知的に状況認識が可能である．スキーマは，知識を，全体の姿で喚起されうる構造へと組織する．

知識の第2の組織形態は「スクリプト」という名で知られている(Schank & Abelson 1977 参照)．スクリプトは，或る状況における典型的な行為や事件の一連の継続を示す（レストラン・スクリプト，或いはスーパーマーケット・スクリプト等)．

最後に「フレーム」(Minsky 1975 或いは Winograd 1977 参照）は，自由な推論の余地を統合的に含む，慣習的に規則化された社会的な世界知を指す．ここでも他の知識の組織表現と同様，或る特定の知識の組織形態は想定されているものの，それは同時に，比較的多くの変数領域を含むことを認める考えが強い．

このスキーマ――スクリプト――フレーム研究は1981年，グリーサー(Graesser）の功績で本質的に拡大された．彼は従来のアプローチでは，知識内容の**多様性**が充分に顧慮されていないことを指摘した．知識内容とは，例えばレトリック的知識，言語的知識，及び因果関係の知識；目的，プラン，及び行為に関する知識；社会的役割，人物，対象，及び空間関係の知識というような知識領域である．彼の考えによるとデータの知覚は，――

どの領域においてであれ——先ず最初の段階でスキーマの同定に通じる．しかし次には，スキーマ適用のため，概念，即ち知識体制の諸形態が使用されねばならない．そのことは解釈や推論，期待，注意の統制，行為の修正等を含むのである．

van Dijk & Kintsch (1983) は——これらの知識体制の諸形態と並び——テクスト理解プロセスにおけるストラテジーの役割を指摘し，そのための理論的モデルを提唱している．スキーマや行為に方向づけられたアプローチと異なり，ストラテジーのモデルは**プロセスに基づいている**．それは（既に van Dijk & Kintsch 1983にあるように），テクスト理解を，命題リストの上を廻る一連のサイクル的な処理操作と見做している．ファン・デイクとキンチュの考えによると，テクストを連鎖的に知覚する際，その都度，特定の一連の命題（「チャンク」と称されるもの）が作業対象となっている．この処理が終わると同時に，その結果は，中間貯蔵庫を経て長期記憶に転移され，そこで貯蔵される．処理プロセスが続く間，その都度，前に処理されたチャンクは，後続のチャンク処理のため利用できる状況にある．

ファン・デイクとキンチュによるとストラテジーは，談話理解に関する我々の手続き型知識にも，理解プロセスの際の，この知識の使用にも関わっている．即ちここではストラテジーの概念が体系的に曖昧なのである．一連のストラテジーの使用は，彼らのモデルによると，以下のようである．先ず命題ストラテジーが使用され，それは語義と統語的「句構造」を対象とし，それらの命題内容を検討する．次に命題ストラテジー適用の結果に基づき，「局部結束性産出」(lokale Kohärenzbildung) と称されるストラテジーによる操作が始動し，それはテクスト内部の一貫性の形成 (kotextuelle Kohärenzbildung) へ通じる．第3段階で，マクロ命題の演繹，及びマクロストラテジーの反復使用によるマクロ構造形成の際，マクロストラテジーの操作が生じる．最後に第4段階で受容者は，スーパー

構造ストラテジーを使う．ここでは特に効果的な下降型処理機構が使用される．

このモデルによると，理解とは，結束性のあるテクストベースの(構造)構成及びマクロ構造とスーパー構造によるテクストベースの構造化ということになる．テクストベースは（長期記憶の一部としての）エピソード記憶における意味指示表現から成立する．マクロ構造は，テーマ的マクロ構造と形態的一組織的スーパー構造とから成立する．van Dijk & Kintsch（1983）ではさらに加えて，テクストが指示している状況のシミュレーション・モデルの活性化が仮定されている．こうなるとテクストベースの構成及び指示領域としてのシミュレーション・モデルの活性化というようにいわば2層に体系化されてくる．

まとめてみよう．全ての言語心理学的，認知心理学的理解モデルの基本的構想は，テクスト理解の際，二つの情報領域が「相互作用する」(inter-agieren）と見做すところにある．即ち「テクストから取り出される」全情報，及び認知領域（記憶）から「喚起」される全知識内容が相互作用するのである（Mandler & Johnson 1980; Rumelhart 1980; van DijK & Kintsch 1981; Just & Carpenter 1980 参照）．テクスト理解はそのさい，理論的にはテクスト**処理**としてモデル化されている．そのような処理は記憶における知識の階層構造的体系化（という考え）に通じている．従ってテクスト理解は，**プロセス**として捉えられ，それに応じて，**動的**なカテゴリーで記述されるべく試みられている．最近テクスト理解モデルにおいて，テクスト一認知の関係と並び，脈絡要素，行為の知識，コミュニケーション状況における非言語的要素の解釈，社会的な枠組に於る脈絡の分析等が考慮されてきている（例えばファン・デイク）．

80年代初めになり，テクスト理解研究の熱狂は，明らかに醒めてきた．理解プロセスがいかに複雑であり，今日までいかに僅かなことしか分かっていないかが明らかになったのである．

今日までのテクスト理解研究の理論的，方法論的・方法的欠点や欠落を指摘する（自己）批判の声は，次第に高まってきている．同時に他方では，テクスト理解研究の学際的な展開により，例えば「視点」等の新しい関心事項が出てき，そのようなことを通じて今まで紹介してきた言語学的，認知理論的理解研究の変化という事態も生じている．

本稿の以下の部分で私は，構成主義的文学研究（konstruktivistische Literaturwissenschaft）の立場から，幾つかの批判的考察を行いたいと思う．それは，従来の研究成果の不備を非難するためではなく，むしろテクスト理解研究の将来に対して構成主義的文学研究が抱く関心を明らかにするためである．この批判の出発点を明らかにするため，私の考えによれば今日までのテクスト理解研究で共通の了解事項となっている事柄を，簡単にまとめておきたい：

1. テクスト処理は，上昇型操作と下降型操作を統合する相互行為的プロセスである．
2. テクスト処理は，言語使用者の長期記憶に体制化されている知識を使用する．この知識は主に次の4領域に関わっている：テクスト；世界；物語の構造；物語の語りの構造．以上のことと並び，将来の研究のために，結束性のあるテクスト構造の産出が考察の対象とされるのみでなく，受容者の中でのテクストの判断評価がオン-ライン-プロセスとして記述されるべき研究方法が試みられている．
3. テクスト理解は，テクスト処理，即ち特殊な情報処理のプロセスである．
4. 情報処理として理解されたテクスト処理は，受容者の認知領域における能動的な，構成のプロセスである．
5. テクスト処理は，連鎖的—，サイクル的—，階層的—，及びストラテジー的な意味組織化のプロセスであり，その目標は，意味的及び認知的

データの結束性をもつ組織の形成である．

6. テクスト処理は，状況的脈絡や社会的脈絡における社会的プロセスである．

7. テクスト理解を介してのテクスト処理のプロセスでは，次の4相は区別されねばならない．

—①意識の相（初期の指摘として Bühler 1908 参照）

—②情緒的構成素

—③状態及びプロセス的構成素

—④独特な創造性（②〜④に関しては Hörmann 1983 参照）

3. 構成主義の視点から見たテクスト理解研究の問題点

以上概観してきたテクスト処理モデルの有する問題は，私の考えでは二つの領域に整理できる．一つは方法論—方法上の問題(A)で，他の一つの原因は，私見では，理解研究において今までのところ，「半分」の認知的転換しか生じていないところにあると思われる(B)．

（A）方法論—方法的問題

（I）経験的研究の一般的な哲学的問題として，理解プロセスの経験的記述や説明が，モデル提示や実在主張を行なえるかという問題が確かに存在する．換言すれば，モデルの説明と実在の主張との関係が，どのような方法で厳密に規定できるかということである．

（II）狭義の方法論的—方法的問題に属するものとして，理解プロセスの間接証明，或いは実証として何を妥当と見做すかというものがある．一要約(想起等)，プロトコル，理解コントロールのための質問への回答；テクストの言語分析能力；或いは受容終了後の比較的満足した状態とするのか．

私の知る限り今日まで，理解を操作化したものとして，何が認められるのかという問いへの厳密な解答はない．このような不満足な研究状況は，理解の概念がまだ充分に明らかにされていず，その結果理解概念或いは概念集合体の諸要素が明確に操作化出来ないというところに起因している．

（Ⅲ）理解の実験調査では，従来記憶実験が好んで利用されていた．それと絡み第２の問題が浮上してくる．即ち，どの記憶モデルが使用されるかということである（既述箇所参照）．そこで，例えば，記憶保持や再生実験を数多くやったあとで，テクスト保持がどのように理解に依存しているのか，記憶と理解の関係はどのようにして厳密に示すことができるのかというような疑問に，正確に答えられないということに気付かざるを得なかったというような事態も生じた．

（Ⅳ）テクストの要約，聴きとり後のプロトコルによる再現，或いはテクストの難易度の評価のさい，今日まで（必然的に）に間接的方法しか適用されていない．さらにそれらの実験は全く特殊な条件下で実施されている．最早行動主義における読者―反応―研究の時代のように，無邪気に実験室へ行くことはないにしても，実験は被実験者にとり，全ての場合特別な条件下でなされている．しかし間接的方法適用のさい常に，その結論が「理解状態」成立にとってどれ程信頼に足るものであるのかという疑問が生じる．加えて被験者によるテクスト再生，要約，精緻化推論等は，テクスト生産であり，被験者の理解能力や受容能力とは異なる能力にも左右される．

（Ⅴ）最近になり漸く次のことが指摘された．即ち理解プロセスにおける能動的項としての受容者を充分考慮するということは，単にその知的側面のみならず，個人全体として幅広く関心や意図，動機，情緒的諸要素を考慮することが必要なのである．しかし，このうちの一要素のみでも真剣に調査のなかに取り入れようとするならば，今日までの殆どの実験は反古同然のものとなるだろう．というのも，それら諸実験で前提とされていた理

解概念は，今日まで殆ど知的一理性的要素にのみ限定されていたからだ．

更に加えて今までのテクスト理解研究の実験方法では，被験者は就中断片的な能力のみを調査されたという事実がある．つまり要求されたのは，常に個別の，或る特定の，予測及び測定可能な能力のみであった．この種の欠点を「手がかり再生（stimulated recall)」や「プロトコル（lautes Denken)」等の方法で補う試みもある（Weidle & Wagner 1982；その展開に関しては Groeben & Scheele 1984参照)．その方法では被験者は，読み作業のさい，受容プロセスに関してできるだけ完全に報告することが要求される．その報告はヴィデオ及び／或いはテープレコーダーに収録され，それらは被験者にたいし或る程度の時間経過後に再生される．彼らはそれを見て，コメントをつけることができる．こうして出来上がった被験者の発言総体は，内容分析の方法で，判断・評価される．内容分析のもつ方法論的諸問題を除いても，この方法では被験者の言語化能力，情緒的要素の締め出し等の諸問題が，変数項として干渉してくることが考慮されなければならない．

（Ⅵ）実験状況設定に関しては最近いわゆる「人間の情況への転換（ökologische Wende)」が観察される「『ハード』（反射反応的）な方法から『ソフト』（対話的一解釈的一共通了解的）な方法へ」という標語のもとで)．しかしすぐに明らかになった問題は，実験状況を「現実に適性化」することで獲得できた諸利点に，実は，解釈学的問題の増加という代償が支払われているということだった．このことは「AかBか」の選言式ではなくて，「AもBも」という連言式の方法を選択したことを意味しよう（その際この二つの方法は将来系統的に各々展開されてゆくべきであろう（Meutsch & Schmidt 1985 参照)．

（Ⅶ）知識の組織化に関するスキーマ理論のモデルは一Thorndyke & Yekovich (1980) が明らかにしたように一今日までのものは充分に厳密なものではない．一般のスキーマ理論は殆ど全ての事象を事後に説明でき（そ

れは常に多すぎるのである)，スキーマ理論からは結果的に，我々の知識は明らかに或る構造に従い組織化されており，その構造は情報を縮約し，階層化する機能をもつのだという，多かれ少なかれ直観的な観念が残るのみとなる．比較的確実だと思われていた個々の事象も，経験的にはまだ説得力を十分に持つには至っていないのである（Hoppe-Graff 1984 参照）．

（Ⅷ）他の方法論的問題は，グレーベン Groeben（1982）が指摘したように，テクスト理解研究が掲げる諸目標の厳密化と経済性の不一致である．比較的厳密な研究方法の使用は，あまりにも高価で非経済的であり，実行不可能である．他方比較的経済性のある実験方法では，余りにも不精確で，研究に寄与するところは少ない（例として命題分析が挙げられよう．比較的短い物語でも極めて多量の命題リストが必要となる．それらをさらにマクロ命題処理記述にまで拡大しようとすると，それはひどく複雑なものになるだろう）．

（Ⅸ）スーパー構造分析では，主として高度に慣習的な物語図式が対象とされてきた．それは確かに重要な一形式であろうが，唯一の形式ではないだろう．今日まで他の物語形式や他のコミュニケーション形態に関する経験的な調査は収集されていない．

（B）理論的一概念的諸問題

以上の方法論一方法の問題に加えて，私の考えでは重要な理論的一概念的問題がある．以下それらを5項目にまとめておきたい．

（Ⅰ）心理学者も言語学者と同様，テクスト理解は通常情報処理，或いはテクスト処理であるという認識から出発する．その背後には，人間の思考プロセスと言われるものを，情報処理プロセスとして捉えるというモデルが存在する．そのような構想の基盤には，私の考えでは，情報理論や，就

中，情報工学の影響をうけた情報概念がある．そのような捉え方に対し，私は，全く真剣に検討に値する有益な構想があると思う（例えば Maturana 1982 の基礎理論に基づくもの）．そこでは認知が情報処理プロセスとしてではなく，情報構成のプロセスとしてモデル化されている．

（II）今日までの記憶モデルは（多層モデルに至るまで，恐らく最近のナイサー Neisser の仕事は別として）貯蔵という考えから出発している．つまり知覚情報が入力され，その後記憶からの情報と結合されるという作業単位を仮定している．短期記憶や長期記憶，意味記憶，エピソード記憶等を作業仮説として使用している．その結果次のような型の，一連の継起を表わすモデルが存在している：貯蔵内容の喚起による情報処理→内容喚起を可能にする「手がかり」（cue）を伴う，処理結果の貯蔵．

しかし果たして記憶が実際，「情報」の貯蔵庫として機能しているのかという問題は，今日まで生物学者，生理学者，心理学者の間で解決されていないのである（脳生理学の立場からの Hellhammer 1983 の論等を参照）．

（III）テクスト処理は，テクストと受容者の相互行為プロセスと見做されている．換言すればテクストを動的に活性化し，受容者と同程度に能動的要素としてみていることになる．このような見方は直観的には納得できそうなものであるが，しかし私の考えでは，生物学的結果とも生理学的結果とも一致しないばかりか，受容者の，構成するという役割に関する，言語心理学者の決定的な態度表明とも一致しないのである．

（IV）心理学的テクスト理解モデルも，言語学的テクスト理解モデルも，通常，暗黙のうちに，テクストとテクスト外の独立した現実の関係を指示意味論的に捉えている．従ってここにも，一方では内包意味論と指示意味論の関係について，他方では指示意味論と構成的な意味論についての問題が存在しているように思われる（Schmidt 1983 参照）．

（V）今日までのテクスト理解／テクスト処理研究では，私の知る限り，受容（Rezeption）と処理（Verarbeitung）の間に明確な境界が引かれて

いない．或るテクストの知覚のいかなるプロセスも，多くの場合すぐに処理の１プロセスと見做されている．そのような見方には利点もあるが，私には一連の欠点もあるように思われる（詳細は次節参照）．

以上概観してきた諸問題へのより有意義な取り組みを目指し，私は――そしてここから本論の，仮説的な未完結の部分が始まるのであるが――テクスト理解研究が認知生物学 Kognitionsbiologie (Maturana 1982) 及び急進派構成主義 Radikaler Konstruktivismus (von Glasersfeld 1986, von Glasersfeld & Richards 1984) の諸研究をひとつの指標とすることを提案したい．そのための幾つかの提言を次節で行う．

4. テクスト理解研究への構成主義的立場からの批判

テクスト理解モデルを概観したさい，受容者が理解プロセスの能動的構成素とみなされており，その行為は意義を成立させるもの（bedeutungs-konstitutiv)，或いは，それ以上に，意義を構成するもの（bedeutungs-konstruktiv）として評価されていることを指摘してきた（Kintsch 1978 参照)．

もし受容者の構成作業という表現が，単にメタファーにとどまるべきでないとすれば，テクスト理解もまた一貫して，構成のプロセスとしてモデル化されねばならない．その際理論的補助手段として，構成主義的な認知理論が考えられる．それは，――幾つかの視点から――生物学者マトゥラナ(Maturana)及びヴァレラ(Varela)，サイバネティクスのフォン・フェルスター (Heinz von Foerster) 及び心理学者フォン・グラーザースフェルト (Ernest von Glasersfeld) 等により（ピアジェに基づき）展開されたものである (Maturana 1982, von Foerster 1985, von Glasersfeld

1986参照).（経験的）構成主義の人々（同名のエアランゲン哲学の流派と混同しないで頂きたい）は，意味に関わるプロセスの出発点として，社会的脈絡における社会化された個を採る．換言すれば個の認知領域とは，環境及び文化的諸制度や伝統というコンテクストに存在する，他の社会化された個との相互行為の中で，意味が生産され，処理され創造的に補完される場なのである．この出発点を具体的に見るため，主にマトゥラナとヴァレラにより展開された，自己生産体制理論（Theorie autopoietischer Systeme）について手短かに述べておく方が良いだろう（Maturana & Varele 1979).

マトゥラナとヴァレラは，生命システムは自己生産的，自己統制的に組織されているという考えから出発している．その構成部分は循環的に組織されており，その結果，そのような生命システムの生命プロセスのあり方は，自身の循環運動の結果とも，手段ともなっている．生命システムの組織は操作的（operational）（よく誤解されているように，構造的（strukturell)ではない）に閉鎖されており，自己の諸状態に関する情報のみで作業する；従って生命システムはその意味で自己指示的(selbstreferenziell)である．生命システムは構造的に――故に組織から見てではなく，組織を構成する構造から見て――可塑的（plastisch）であり，それ故に外界からの作用によるひずみを修正できる．生命システムは環境世界の媒体と構造的に結合されており，しかもそれは，回りの媒体が，生命システムのなかに設定され生命システムにより統合される様々な可能性を選択するような結合なのである．即ち，媒体が，生命システムのなかで反応のどのような可能性が設定されるかを選択するというようなあり方で，生命システムと媒体は相互作用を行うのである．生命システムは恒常性をもち，その意味で，生存するシステムとして媒体に適応している．そのことは進化論的にみても一貫性をもっており，その結果，「適者生存」(survival of the fittest）というダーウィンの原則が，「不適者死滅」(death of the unfit)

というように表現されることになる．比較的高度に発達した生命システムは，閉鎖された神経組織を有する．その結果それらは，自己の内的状態と，回帰的に相互行為を行うことが可能である．即ち自己一意識を発展させることができるのである．他方，閉鎖神経組織は，生命システムが自己自身の状態のみとしか交流できないことの原因でもある．神経組織は受容器，及び効果器の作用と共働し，我々の体験の世界を，それも認知体系の中に具現している．即ち生命システムにおいて認知領域は，認知領域の中に含まれているのである．

生命システムは構造及び情況に規定されている．即ちそれは機能的に働き（今日機能したことは，明日もまた機能するであろうと予想する），それ故に現状維持的である．

生命システムは常に現在の中で作動している；過去も現在の中で構成された過去である．生命のこのような諸規定を厳密に受け取るならば，そこから広範な哲学的帰結が出てくるだろう．そのなかの3項目について簡単に論じてみたい．

閉鎖神経組織をもつ生命は外界を模写しない．むしろ，環境世界や他の生命システムと交渉し，その成功を積み重ねることにより，外界のモデルを構成していくのである（現実モデル）．その事実に対応して，客観的事実の正しい認識というような概念は，経験のプロセスにおける成功した操作的知識の獲得という概念にとって代られるべきである．従って客観性は，事実に対し妥当性を持つ概念としてはあり得ず，ただ間主体的なものとして，及び或る共通の経験的相互行為基盤への合意としてのみ概念化され得るのだ．また『真実』は構成主義の立場からみると，合意された諸規則と判断基準に従った，間主体的立証手続きの成功として理解される．

もし生命システムが相互行為を行うならば，その際それらは，合意された相互行為領域を形成し，その領域はコミュニケーションのための基盤を作成する．

コミュニケーションは構成主義的に見ると，（情報工学モデルに従った）情報の交換としてモデル化されるのではなく，相互に交信しあう個体の認知領域で平行して行われる情報構成となる．即ち言語コミュニケーションにおいて，予め実在する「情報量」が送り手から受け手へ移動されるのではない；そうではなくて，むしろ認知領域において――（例えば自然言語テクストのような）慣習化された「触発装置」(Auslöser)に準拠して――相互の方向指示行為を通じて，情報が先ず構成されるのである．「誰かにとっての意味」として情報は，厳密にいうと，常に主体に依存した大きさしか持たない．（その際常に主体は，社会的脈絡における，社会化された個であるということを忘れるべきではない．）

間主体的に成功したと見做されるコミュニケーションプロセスは，二つの前提に基づいている．その一つは，人間の認知装置の比較可能性という生物学的前提であり，他の一つは，言語的慣習や語い・統語・文体のステレオタイプに関して比較可能な構成基盤を当該の個々人へ媒介するような，比較可能な言語を介しての社会化史と，文化を吸収していく歴史という社会学的前提である．

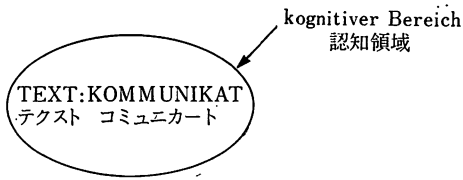
これらの諸慣習は，自然言語の話し手が一つの物理的現象を自然言語のなかで**テクスト**と同定し，その現象に，習得した構造化操作や処理操作を適用することを可能にする．Kintsch（1978：66）も主張するように，受容者にとり有意味な単位としてテクストが存在するのは，受容者の認知領域においてのみである．コミュニケーションする個体にとり，テクストは共同に利用される認知的契機を形成する．

1個体が自己の認知領域で，触発装置としてのテクストの上部に展開する認知操作の総体を，私は**コミュニカート**（Kommunikat）と名付ける．その際私は（ただ理論上）コミュニカートを次の3次元に分類命名する；第1を心理言語学研究に基づき**命題**の次元（propositionale Ebene）；第2をヘーアマンに基づき，**情緒的次元**（affektive Ebene），第3を私は，

実生活に関わる**有意味性**（lebenspraktische Relevanz）と称する．第3は或るテクストに関わる作業の際常に生じている，実生活に対し有する有意味性への判断評価と称され得る次元である．

従って，構成主義的言語理論(Schmidt 1983 参照)の枠では，テクストは —— 該当する慣習的諸規則に基づき —— テクストとして構成される物理的項とみなされる．『コミュニカート』は伝統的表現に従うと『意義』(Bedeutung）が付加された全てのものを指す．しかしその際の『意義』は情緒的要素及び有意味性の要素の分だけ「増大」している．

このモデルでは，その意味（Sinn）に関しての発言が，真か偽かを証明するために関係づけられるような客観的な規模としてのテクストは最早存在しない(Heringer 1984参照)．テクストをテクスト**として**知覚することは，常に或る一つの認知領域と関わることなのであり，或る個体が使用する一連の認知ストラテジーに依存しているのである．このような考え方と，心理言語学的及び受容美学的（Iser, Jauß）研究の**相互行為モデル**は最早合致しない．構成主義的理由から，或る客観的な規模の「テクスト」が，或る客観的規模の「受容者」と出会い，両者がいわば同一基盤で相互に交流するという出発点はとれない．そうではなく，テクストやコミュニカートは，個々人の認知領域の**なかで**のみ**有意義な大きさ**として存在するのである．



既述の概観からの第2の帰結は，情報**処理**としてのテクスト理解は，説得性のあるモデルとはなり得ないことである．というのも情報は（上でみたように)，認知領域の**なかで**のみコミュニカートの形で存在し，常に，生産され組織され，組織変更されるわけで，テクストから「取り出される」のではないからだ．このように見てくると，構成のプロセスとして理

解を捉えるという考えは，より納得のいくものになっただろう．

さらに，存在論的な性格を持つ指示モデル（Referenzmodell, テクストは存在論的意味で現実に関連づけられているというもの）も再検討されざるを得なくなる．というのも，成功した操作的及び存在論的知識の基盤の上で「世界」として取り出されるものも，必然的に，認知領域内で生じているのであるから．別の言葉で表現すれば，指示（関係）とは認知領域内での一つの特殊な操作であり，テクストとテクスト外の客観的所与との間の比較の操作ではないのである．以上の考察から，**受容**（Rezeption）と**処理**（Verarbeitung）を区別することの重要性が引き出されてくると考えられる．受容は，コミュカートを生産する創造的なプロセスである．処理は，コミュニカートを他のコミュニカート，それも特定の記述可能な処理プロセスや処理規則等に従って，関連づけるプロセスである．この二つの操作概念を区別することにより，処理プロセスを特別な方法で制度的に組織化されたプロセスとして認め，記述する可能性が出てくると思われる．このことは，特に文学研究にとり重要である[3]．

最後に構成主義的な論考の枠内では，**記憶の貯蔵モデル**も非常に疑わしいものとなる．その代り次のマトゥラナの引用で示される方向での作業の可能性が考えられるかもしれない．「様々な機会に 喚起されるような 環境世界の表象の貯蔵庫としての記憶は，神経生理学的機能としては存在していない」(1982：62；詳しくは Rusch 1985 も参照．他の生物学者や神経サイバネスティクス学者達も 全く似た方法でこの考えを 示している，Hellhammer 1983 参照)．マトゥラナは想起や記憶作業の説明として次のような仮説を立てている：そのシステムは環境の表象（即ち現実像や情報量）を貯蔵するのではなく，特定の相互行為を，特定の情動の配置で内包するのである．初めて登場する操作は，「不安定性」という情動要素で，成功裡に再登場する操作は，肯定的な情動要素で内包される．換言すれば，同じ種類の方向指示の相互行為は，それらの情動的内包に応じて再認される

のである．そしてこのように情動差により遂行される同種の認知クラスのプロセスをマトゥラナは，想起或いは再認と称する（1982：63）．（E. von Glasersfeld 1984：7 も参照）．

構成主義的作業仮説から出発すると，理解を能動的な意図的プロセス（aktiver intentionaler Prozeß）と捉える全てのモデルは，非常に問題のあるものになる．多くの研究者は「理解」という表現が体系的にみて多義的であり，状態，プロセスおよび結果を記述していることを指摘している．プランやストラテジーに従い遂行される等々の，目標志向的な意図的プロセスとして，理解をこのように行為理論的に記述するというやり方が，恐らく，誤謬を生じるようなモデルを生み出しているのだろうという指摘が，最近増加している．この問題に関し2点簡潔に論じたい．

ヘリンガー（Heringer）は1984年，理解は内的行為としてではなく，むしろ結果として記述されるべきだろうと言っている．そして彼は，理解が意図的に生じるものではない，即ち理解は当人の意のままにならないという理論を立てている．リヒテンベルク（Lichtenberg）の「私が考えているのではなく，それが私を考えている」というアフォリズムに依り，ヘリンガーは「私が理解するのではなく，それが私を理解する」とさえ主張している．これは確かに大胆な仮説であろう．しかし私は，我々が長い間その線上で考えてきた，意図的行為として理解をモデル化することに，実際根拠があるのか，検討すべき時期が来たのではないかと思うのである．

次にルッシュ（Rusch 1984）が展開した仮説について論じたい．ルッシュは，理解が**観察者カテゴリー**であること，即ち理解プロセスの観察者のみが使用でき，理解者自身は使用できないカテゴリーであることを主張している．それに従えば「私は理解する」は有意義ではないが，しかし「君は理解する」は有意義な文となる．ルッシュはその際，自己の意味するところは，他者の予期との関係において初めて有意義なものとなり得るという考えを，自分の仮説の根拠としている．換言すれば，「理解」とい

う表現は，Bの態度へのAの評価を命名したものであり，Aは自身に関して「私は理解する」とは言えないのである．それにも拘らずAが「私は理解する」というとき，それは相互行為のコミュニケーションプロセスを，「擬似的に」内的コミュニケーションプロセスへ転換していることになる．（Aは意味することと理解すること双方を擬似的に行っているのである.）従って理解とは，或る特定の方向指示期待に対応することであり，或る特定の内的プロセスを成功裡に遂行することではない．別の言葉で言うと，理解は「不確実なものであり」，コンテクストや情況，合意や承認に依存したものなのである．以上のような考察に従うと，「客観的な理解」等ということは最早有意義な概念ではなくなる．理解プロセスの物差としては，ただ諸判断基準を含む社会化プロセスのみが有効なのであり，テクスト内在の状態やコミュニケーション内の（コミュニケーション媒体内の）状態が物差として有効なのではない．

ルッシュの仮説によるとテクスト理解研究は，他でもなく観察者が自身の理解や把握行為を，コミュニケーションにおける理解に関しての既知の諸基準に従って分析・評価，変形，再分析等を行なうときの，自己照応的な認知プロセスのモデルを提示するものとなる．

ここにみられる解釈学的問題はプロトコルの方法の際も生じている：この場合も「実際の」理解プロセスが写し取られるのではなく，より高度な説明力を求めて，理解の経過の理論的モデルを，用具として使っているのである．ここでも我々は，全てのテクスト理解研究の基本に横たわる認識理論的問題に当面するのである．

5. テクスト理解への構成主義的仮説

テクスト理解のモデル形成のための基礎となるべく，以下に展開される

仮説は，テクスト理解研究の様々な領域でみられる構成主義的諸傾向をまとめたものである．その際「理解」は——哲学的意味で——観察者カテゴリーとして解釈されており，そこから自覚的／無自覚的；言語的／非言語的等のカテゴリーに関する狭義の認知プロセスの判断評価への逆推論は許されない．科学としての理解研究は，従って，単に理解プロセスのモデルのみを提示するものである．何故なら理解は，心的プロセスとして直接観察できないからである．理解の構造や構成に関する理論的予測(考察)は，例えば認知理論的主体モデル（Groeben / Scheele 1977；Groeben 1982 参照)と称される領域で展開され，人間の生態からみて有効で有意義な行為状況（Neisser 1976；Kaminski 1976, 1979）で検証されねばならない．

構成主義的テクスト理解モデル形成の出発点は，理解は或るテクストの上に展開されるコミュニカート（＝テクストの心的表象）形成として，理論的に記述され得るという想定であった．コミュニカート形成プロセスの特徴的な点は，極く簡単に総めると次のようになる（Viehoff & Schmidt 1985)：

—コミュニカート形成のプロセスは，実生活の中で，より大きな行為のなかに埋め込まれている．

—コミュニカート形成プロセスは，部分プロセスを階層的に組織し，統合する，ひとつの包括的なプロセスである．そのプロセスは次の 3 領域に分析できる：個体の意図や情報による自己方向づけと，自己省察の**理性的**領域；**情動的**領域；コミュニケーションプロセス，及びその結果の実生活への**有意義性**を評価・判断する領域[4]（Spiro 1982, Dorner 1983, Hörmann 1983a, Kluwe 1979, Schmidt 1984 参照).

—コミュニカート形成プロセスは，社会化の歴史の中で獲得され展開された（認識論的／発見法的）知識と具体的な行為(Leontjew 1979；Neisser 1976 参照)を統合するような交点である．その際知識とは，常に「知識として評価されるものである」ことを考慮すべきである；換言すれば

知識は常に制度的に規定されている（Verdaasdonk 1982 参照）.

—コミュニカート形成プロセスは，制御された認知プロセスである．アノーヒン（Anochin 1976），ギャランター他（Galanter Miller & Pribram 1960）及びハッカー（Hacker 1978, 1980 刊）の諸論に従い，予測的な認知スキーマ（ハッカーの「操作的模写システム」1978 参照，さらに von Cranach, Kalbermatten, Indermühle & Gugler 1980参照）は，或る行為の行動プログラム（Stadler, Schwab & Wehner 1979）やその知覚的フィード・バックを遂行できると想定され得る．

—コミュニカート形成プロセスは，階層的・分節的な順序をもつ部分プロセスに分析され得る（van Dijk & Kintsch 1983, Groeben 1982参照）．それらのプロセスは，様々な複雑さや要請の度合を有し，全てが同程度に意識され得るものではない（Volpert 1983; von Cranach 1983; van Dijk & Kintsch 1983 参照）.

—コミュニカート形成プロセスは，意味の恒常性（Sinnkonstanz）というヘーアマンの仮説の意味で（Hörmann 1976 参照）主体により意図的に構造化されており，結束性を志向している．この仮説は特に文学作品の受容プロセスにおいて有効性をもつ筈である（Schmidt 1984）.

—コミュニカート形成プロセスは，情況即ち脈絡指向的である（Clark & Carlson 1980 参照）.

—コミュニカート形成プロセスは，生物的前提及び社会化の歴史という前提——それらは記憶のなかに沈澱している——に左右される（Schmidt 1980）.

—コミュニカート形成プロセスは，テクスト組織化の諸要素や構造に関する，概念駆動的な，受容の諸ストラテジーを用い操作する（Vipond & Hunt 1984 の，「ポイント，ストーリー，情報駆動型の読み作業」の区別; van Dijk & Kintsch 1983 の「命題的，局部的結束的，マクロ的，及びスキーマ的ストラテジー」の区別; Meyer & Rice 1982;

Groeben 1982参照).

—コミュニカート形成プロセスは，スキーマ産出／変更のプロセスである．その過程でテクスト表層，或いはテクストの組織化諸原則の特殊な諸要素により，読みのストラテジーが触発され，目標及び脈絡の状況に応じて形成されていく（Meutsch 1984, 1985; Graesser u. a. 1979, 1980).

—コミュニカート形成プロセスは，その過程で後方及び前方指向的操作という特徴を有する（Crothers 1979; Clark 1977; Warren, Nicholas & Trabasso 1979参照)．その際後方指向の認知は，再修正等により結束性構成を導き，前方指向の認知は（Schank & Lebowitz 1980 の「理解における予測性」に関する考えを参照)，特殊な変形を施された結束性予期を形成する．そのような予期は様々な理解ストラテジーの次元で，関心や目標により特殊化された理解プロセスとして解釈され得る（Hidi, Bird & Hildyard 1982; Rockheit & Kock 1984参照).

—コミュニカート形成プロセスは，その前方指向的予測的認知において，社会的認知の仮説理論でいう仮説検証—修正態度（Hypothesentestvariationsverhalten)（Bruner 1957, 1973; Lilli 1978; Bierhoff 1979; von Granach u. a. 1980）として構成されていき，このようにして当初から，読者によるテクスト受容の精密化の増大へと導く（Falmagne 1970, Shimron 1980, Groner 1978, Omansson 1982 参照).

6. テクスト解釈—構成主義的視点から

「解釈」は曖昧性で悪名高い文学研究の概念の一つである（Schmidt Hrg. 1972 参照)．解釈に関する発言は，従って，それが多くの解釈可能性のなかで，どの観点との関連づけを（望んで）いるのとかいうことに，

常に注意してなされるよう心掛けられるべきである．構成主義的立場から，解釈の問題に対して次のような仮説が立てられる．

—もし解釈が，テクストの正しい意義と，著者の正しい意図を確認することとして解されるならば，それは，以上概観してきた認識論的及び意味論的理由から，科学的な操作としては実行不可能となる．

—もし「解釈」の名で理解困難（性）が生じたときのための，自覚的な援助行為が意味されているのならば(Heringer 1984: 60参照)，解釈は教育的意図に基づいた，或る主体による，結束性のあるコミュニカートの形成と同じことになる．

—もし解釈が受容後のコミュニカート拡大を意味するならば，それは，或る主体がコミュニカートの関連づけのため新しい，或いは別の枠を提案するという，文化的行為に他ならない．その際該当する判断基準は合意(Konsens)，信憑性（Plausibilität），漸新性（Innovation）であり，真実や虚偽というようなものではない．この意味で解釈は，文学システムの参加行為カテゴリーに該当する（非科学的テクスト加工行為；Schmidt 1983参照）．

—専門家的読み方の制作と解された解釈は，専門的読者に限定されている．専門家的読み方が，実際に，「通常の読者の」読み方に影響を与えているということを，経験的に証明するものは何もない（Glotz 1974, Ramm 1977, Scheffer 1985 参照）．

—合意的読み方の産出としての解釈は，もはや実際の主体の経験——それは文学テクストとの交流の中で生じるのであるが（しかも多価値慣習に従って）(Schmidt 1984, Meutsch & Schmidt 1985 参照)——とは対応しないだろう．シェファー (Scheffer 1985) は，全ての読者から承認されるような解釈は，最早解釈ではなく，文学テクスト自体であるということを指摘している．

—作者やテクストの活性化，生命付与としての解釈は，文学システム内での生産的，文化的機能を持つが，しかし，科学システム内の「文学研究」ではない．

—主体的なコミュニカート形成に関する報告として解された場合，解釈は，コミュニカート形成プロセスと，そのプロセスに関する語りとしての性格をもつ報告との間のカテゴリーの相違を見過ごしている．或る主体のコミュニカート形成プロセス，及びその感情の配置は，必然的に，社会的に慣習化された自然言語によっては適切に表現され得ない．

解釈をめぐる構成主義的理論への反論の際（Fisch 1980 の類似の議論への反論のように），常に，客観的なテクスト意義を想定することによってのみ厄払いができるとされる恣意性や任意性という，恐怖心からの妖怪が持出されてくる．しかしその妖怪は幻想に過ぎない；というのもコミュニカート形成プロセスは，常に承認されることを目指しているからだ；それは——特に文学研究や文学授業の領域では——慣習や社会化の歴史に左右される；要するにそのプロセスは集団により規定されているのである．何故なら社会集団とは，理解に関する予測，価値，美的方向性指示のための共通の図式を与えるものだからである．このように考えてくると，まず「解釈」（のため）の信頼性のある構想を展開し，解釈がもつ社会的機能の明示化を試み，行為を通じて充分にその社会的機能の正当性を獲得することの方が，解釈を文学研究，及び学校教育や大学での文学授業の中心や要点にする（或いは恐らく現在支配的な実践領域となっているであろうが，その事態をそのままにしておく）ことよりも重要だと私には思われるのである．

「…解釈から理解プロセスの説明・分析へ」いよいよ移るべき時期が到来しているというフロイントリープ（Freundlieb 1982）の提案も私には非常に納得できるものである．しかしこの一歩を踏み出すことは，この

「理解プロセス」に関してできるだけ多くのことを知ることを前提としている．本論の目的はそのために少しでも貢献できることにある．

注

1 「テクスト理解プロセスに関して，我々が今日までに知り得たことは ―― 認知心理学の掲げる要求や目標に比べると――僅かである．我々はテクストの諸特徴；聞き手の諸特徴（特に聞き手の知識構造）及び状況の諸特徴が，理解結果に影響を与えることを知っている．しかし具体的にどのようにして生じているのかは，ほとんど不明なのである．ただ我々は，『スキーマの適用』や『スクリプトの例示化』という比較的漠然とした概念でもって，事後にそのプロセスを説明できるというだけなのだ．認知過程の仮定から厳密な予測が引き出され，検証されるという性質の実験がまだ多く欠如している」(Hoppe-Graff, 1984：32).

2 キンチュの発言：「心理学者にとり，テクストベースは，従って意味は，事実世界の対象物ではなく，ある特定の心理的プロセスの結果産出されたものに過ぎない．我々がテクストを読むとき，読者の心の外にある唯一のものは，各ページに記載された文字の像に過ぎない：これらの視覚対象によりコミュニケーションされた単語や，それらの単語で組織された句や文及びそれらの意味は，読者の中で生じている複雑で階層的な心理的プロセスの結果である．特に読者が，現実の物理的刺激，状況コンテクスト及び自己の世界知から構成したテクストの意味は，テクストの中に定住しているものなどではなく，読者の側のテクストへの反応なのである」(1978, 66) 参照.

3 この（Schmidt 1980 他で展開され理由付けがなされた）区別に対し，次のような反論がよくなされる．即ち，受容と処理は明確に区別できない，何故なら受容も処理を含むからだ，と．この反論は特徴的なことに，「半分の」構成主義的理論でもって行われている；何故半分かというと，受容者の能動的役割は肯定されているが，テクストは相変わらず意味の担い手として見られているからだ（例えば上昇型プロセスと下降型プロセスの区別を参照）．そのような考え方にとって受容行為は固定したテクスト意義の「変形（Modifikation)」として現れる．それに対し一貫性をもった構成主義理論では，受容は，コミュニカート形成と見做される．従って，受容における受容操作と処理加工操作との区別は，実体を失うことになる．その結果「処理加工」という概念は自由になり，受容を前提とし，それに接続するある認知的操作――例えば解釈，批評，他のメディアへの転移等（cf. Wienold 1972）という――受容コミュニカートへ新しい別のテクストを付加するための認知的操作を指すことができるようになる．この処理加工は制度的でも非制度的でもありうるし，また，専門的にも非専門的にもなされ得る．但し

その事態は処理加工結果の評価の際は——特に文学体系においては——必然的に顧慮されるべきである．

モイチュ Meutsch (1985) の反論は上述の反論とは別である．彼は正当にも，経験的調査研究では受容結果に直接アプローチすることはできないことを指摘している．むしろ受容結果はただ受容者のテクストについて発言（例えばプロトコル等）を介してのみ解読できるのであり，その際，そのような言語化の過程で受容プロセスと処理加工プロセスがそもそも区別可能なのかという疑問が生じてくるのは当然である．

4 理性的領域はコミュニカート形成の構造的分野，情動的及び有意義性の領域はコミュニカート形成の動的分野として規定され得る．両分野は認知，即ち，生命システムの自己創造性の保持を実現するために共同で働く．

BIBLIOGRAPHIE

Anderson, R. C., *Schema-directed processes in language and comprehension.* in Lesgold, A. M., Pellegrino, J. W., Fokkema, S. D. & R. Glaser, eds., 1978. *Cognitive psychology and instruction.* New York: Plenum Press 1978, 67-82.

Anochin, P. K., *Das funktionelle System als Grundlage der physiologischen Architektur des Verhaltensaktes,* Jena: Fischer 1967.

Ballstaedt, St. P., Mandl, H., Schnotz, W. & S. O. Tergan, *Texte verstehen, Texte gestalten,* München: Urban & Schwarzenberg 1981.

Belleza, F. S. & G. H. Bower, *Remembering script-based text.* in: *Poetics,* 11, 1982, 1-23.

Bierhoff, H. W., *Kognitive Organisation, Wahl und Voraussage.* Göttingen-Toronto-Zürich: Hogrefe 1979.

Bock, M., *Überschriftsspezifische Selektionsprozesse bei der Textverarbeitung. Archiv für Psychologie* 1978, 131, 77-93.

Bransford J. D., *Human Cognition. Learning, understanding and remembering.* Belmont, Cal.: Wadsworth. 1979.

Bredenkamp, J. & W. Wippich, *Lern- und Gedächtnispsychologie.* Band 2. Stuttgart: Kohlhammer 1977.

Brewer, W. F., *Literary theory, rhetoric and stylistics: Implications for psychology.* in: Spiro, J., Bruce, C. C. & W. F. Brewer, eds., *Theoretical Issues in Reading comprehension,* Hillsdale, N. J.: Erlbaum 1980, 221-239.

Bruner J. S., *On Perceptual Readiness.* in: *Psychological Review* 1957, 123-157.

Bruner, J., S., *Beyond the information given. Studies in the psychology of tenowing,* London: Allen & Unwin 1973.

Bühler, K., *Über das Sprachverständnis vom Standpunkt der Normalpsychologie.* Bericht über den 3. Kongreß für Psychologie 1908 (zitiert nach Hörmann 1983).

Clark, H. H., *Inferences in comprehension.* in: Laberge, D. & S. J. Samuels, eds., *Basic processes in reading. Perception and comprehension,* Hillsdale, N. J.: Erlbaum 1977, 243-263.

Clark, H. H. & Th. B. Carlson, *Context for comprehension.* in: Long, J., A. Baddeley, eds., *Attention and performance IX.* Hillsdale, N. J.: Erlbaum 1977.

Collins, A. M. & E. F. Loftus, *A spreading activation theory of semantic processing. Psychological Review* 1975, 82, 407-428.

Collins, A. M. & M. R. Quillian, *Experiments on semantic memory and language comprehension.* in: L. W. Gregg, ed., *Cognition in learning and memory.* New York: Wiley 1972, 117-137.

Craik, F. I. M. & R. S. Lockhart, *Levels of processing. A framework for memory research. Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 1972, 11, 671-684.

von Cranach, M., Kalbermatten, U., Indermühle, K. & B. Gugler, *Zielgerichtetes Handeln,* Bern-Stuttgart-Wien: Huber 1980.

von Cranach, M., *Über die bewußte Repräsentation handlungsbezogener. Kognitionen.* in: Montada, L., Reusser, K. & G. Steiner, Hrsg., *Kognition und Handeln* (Festschrift H. Aebli), Stuttgart: Klett-Cotta 1983, 64-76.

Crothers, E. J., *Paragraph, Structure, Inference,* Norwood, N. J.: Ablex 1979.

van Dijk, T. A., *Macrostructures.* Hillsdale, N. J.: Erlbaum 1980.

van Dijk, T. A., *Textwissenschaft.* München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1980b.

van Dijk, T. A. & W. Kintsch, *Cognitive psychologie and discourse: Recalling and summarizing stories.* in: W. Dressler (Hsg.) *Current trends in textlinguistics.* Berrlin 1978, 61-80.

van Dijk, T. A. & W. Kintsch, *Strategies of Discourse Comprehension,* New York: Academic Press 1983.

Dorner, D., *Problemlösen als Informationsveranbeitung,* Stuttgart: Kohlhammer 1976.

Dörner, D., *Kognititive Prozesse und die Organisation des Handelns.* in: Hacker, W., Volpert, W. & M. v. Cranach, Hrsg., *Kognitive und motivationale Aspekte der Handlung,* Bern-Stuttgart-Wien: Huber 1983, 26-37.

Falmange, R. J., *Construction of a hypothesis testing model for concept*

identification. in: *Journal of Mathematical Psychology* 1970, 7, 60–96.

Fish, St., *Is there a text in this class?* Cambridge, Mass.: Harvard UP. 1980.

von Foerster, H., *Sicht und Einsicht. Versuche zu einer operativen Erkenntnistheorie* 1985. Braunschweig-Wiesbaden: Vieweg (im Druck).

Freundlieb, D., *Understanding Poe's talks: a schema-theoretic view.* in: *Poetics,* 1982, vol. 11, no. 1, 25–44.

von Glasersfeld, E., *Einführung in den radikalen Konstruktivismus.* in: P. Watzlawick, Hrsg., *Die erfundene Wirklichkeit.* München: Piper 1987, 16–38.

von Glasersfeld, E., *Konstruktivistische Diskurse. LUMIS-Schriften* 2, Universität/GH Siegen. Institut f. Empirische Literatur- und Medienforschung 1984.

von Glasersfeld, E., *Begriffssemantik und Wissenskonstruktion.* Braunschweig-Wiesbaden: Vieweg 1986, (im Druck).

von Glasersfeld, E. & J. Richards, *Die Kontrolle von Wahrnehmung und die Konstruktion von Realität.* DELFIN III, Aug. 1984, 4-25.

Glotz, P., *Die Bedeutung der Kritik für das Lesen.* in: A. C. Baumgärtner, Hrsg., *Lesen. Ein Handbuch.* Hamburg: Verlag für Buchmarktforschung, 1974, 604–622.

Graesser, A. C., *Prose comprehension beyond the word.* New York 1981.

Graesser, A. C., Gordon, S. E. & J. D. Sawyer, *Memory for typical and atypical actions in scripted activities: test of a script pointer + tag hypothesis.* in: *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 1979, 18, 319–332.

Groeben, N., *Leserpsychologie: Textverständnis — Textverständlichkeit,* Münster: Aschendorff 1982.

Groeben, N. & B. Scheele, *Argumente für eine Psychologie des reflexiven Subjekts. Paradigmawechsel vom behavioralen zum epistemologischen Menschenbild,* Darmstadt: Steinkopff 1982.

Groner, R., *Hypothesen im Denkprozeß. Grundlagen einer verallgemeinerten Theorie auf der Basis elementarer Informationsverarbeitung,* Bern-Stuttgart-Wien: Huber 1978.

Hacker, W., *Allgemeine Arbeits- und Ingenieurpsychologie,* Bern-Stuttgart-Wien: Huber 1978.

Hacker, W., Hrsg., *Optimierung kognitiver Arbeitsanforderungen,* Bern-Stuttgart-Wien: 1980.

Hellhammer, D., *Gehirn und Verhalten.* Münster: Aschendorff 1983. (*Münsteraner Skripten zur Psychologie,* H. 2).

Heringer, H. J., *Textverständlichkeit. Leitsätze und Leifragen.* in: W. Klein, Hrsg., *Textverständlichkeit—Textverstehen. LiLi. Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 55, 1984) 57-70.

Hidi, S., Baird, W. & A. Hildyard, *That's Important but is it interesting? Two Factors in Text Processing.* in: A. Flammer & W. Kintsch, eds., *Discourse Processing,* Amsterdam: North-Holland 1982, 63-72.

Hörmann, H., *Meinen und Verstehen. Grundzüge einer Psychologischen Semantik,* Frankfurt/M 1976.

Hörmann, H., *Über einige Aspekte des Begriffs 'Verstehen'.* in: Montada, L., Reusser, K. & G. Steiner, Hrsg., 1983. *Kognition und Handeln,* (Festschrift H. Aebli), Stuttgart: Klett-Cotta 1983, 13-22.

Hörmann, H., *On the difficulties of using the concept of a dictionary—and the impossibility of not using it.* in: Rickheit, G. & M. Bock, eds., *Psycholinguistic Studies in Language Processing,* Berlin—New York: de Gruyter 1983a, 3-16.

Hoppe-Graff, S., *Verstehen als Kognitiver Prozeß. Psychologische Ansätze und Beiträge zum Textverstehen.* in: Klein, W., Hrsg., *Textverständlichkeit—Textverstehen.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1984, 10-37 (=*LiLi. Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 55, 1984).

Just, M. A. & P. A. Carpenter, *A theorey of reading: from eye fixations to comprehension.* in: *Psychological Review,* 87, 1980, 329-354.

Kaminski, G., *Rahmentheoretische Überlegungen zur Taxonomie psychodiagnostischer Prozesse.* in: Pawlik, K., Hrsg., *Diagnose der Diagnostik,* Stuttgart: Klett 1976, 45-70.

Kaminski, G., *Ökologische Perspektiven in pädagogisch-psychologischer Theoriebildung und deren Konsequenzen.* in: Brandstätter, J., Reinert, G. & K. A. Scheewind, Hrsg., *Pädagogische Psychologie: Probleme und Perspektiven,* Stuttgart: Klett-Cotta 1979, 105-130.

Kintsch, W., *Towards a model of discourse comprehension and production. Psychological Review,* 85, 1978, S. 363-394, (1978a).

Kintsch, W., *Comprehension and memory of text.* in: W. K. Estes, ed., *Handbook of learning and cognitive processes.* vol. 6, Hillsdale, N. J.: L. Erlbaum 1978, (1978b).

Kintsch, W., *Learning from Text, Levels of Comprehension, or: Why anyone would read a story anyway.* in: *POETICS* 9, 1980, 86-98.

Kluwe, R., *Metakognition,* München: Psychologisches Institut der Universität 1979.

Leontjew, A. N., *Tätigkeit, Bewußtsein, Persönlichkeit,* Berlin: Aufbau 1979,

Lilli, W., *Die Hypothesentheorie der sozialen Wahrnehmung.* in: Frey, Dieter, Hrsg., *Kognitive Theorien der Sozialpsychologie,* Bern-Stuttgart-Wien: 1978, 19–46.

Mandl, H., Tergan S. -O., & St. -P. Ballstaedt, *Textverständlichkeit-Textverstehen.* in: Treiber, B. & F. E. Weinert, Hrsg., *Lehr-Lern-Forschung,* München: Urban & Schwarzenberg 1982, 66–88.

Mandler, J. M. & N. S. Johnson, *On throwing out the baby with the bath water: a reply to Black and Wilensky's evaluation of story grammars,* in: *Cognitive Science,* 4, 1980, 305–312.

Maturana, H. R., *Erkennen: Die Organisation und Verkörperung von Wirklichkeit.* Braunschweig-Wiesbaden : Vieweg 1982 (*Wissenschaftstheorie. Wissenschaft und Philosophie,* Bd. 19).

Maturana, H. R. & F. J. Varela, *Autopoiesis and Cognition.* Boston: Reidel 1979 (*Boston Studies in the Philosophy of Science*).

Miller, G. A., *The magical number seven, plus or minus two. Some limits on our capacity for processing information. Psychological Review* 1956, 63, 81–97.

Miller, G. A., Galanter, E. & K. H. Pribram, *Plans and the structure of behavior.* London: Holt, Rinehart & Winston 1960.

Minsky, M., *A framework for representing knowledege.* in: P. Winston ed., *The psychology of computer vision.* New York: McGraw Hill 1975, 211–277.

Meutsch, D., *Wie 'entsteht ein verständlicher Text? Einflüsse literarischer und nicht-literarischer Kontexte auf zielspezifische Verstehensprozesse* in: Klein, W., Hrsg., *Textverständlichkeit Textverstehen,* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1984, 86–112 (=LiLi. Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik 55, 1984).

Meutsch, D., *Literatur versehen. Eine empirische Studie.* Braunschweig-Wiesbaden: Vieweg 1985 (im Druck).

Meutsch, D. & S. J. Schmidt, *On the role of conventions for understanding literary texts.* 1986 (submitted).

Meyer, B. J. F. & G. E. Rice, *The interaction of reader strategies and the organization of text.* in: *TEXT* 2, 1–3, 1982, 155–192.

Neisser, U., *Cognition and reality,* San Francisco: Freeman 1976.

Omanson, R. C., *The relation between centrality and story category variation.*

in: *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*21, 1982, 326-337.

Ramm, K., *Unverbundene Materialin zur Diskussion über den Zusammenhang von Literaturkritik und literarischem Markt am Beispiel von Herbert Achternbusch.* in: J. Drews, Hrsg., *Literaturkritik — Medienkritik,* Heidelberg: Quelle & Meyer 1977, S. 1-11.

Rickheit, G. & H. Kock, *Interest and Infernce.* Paper presented at the workshop on "Inferences in Discourse Processes" at the "Zentrum für interdisziplinäre Forschung" at Bielefeld University, July 10-12, 1984.

Rumelhart, D. E., *Notes on a schema for stories.* in: Bobrow D. G. & A. Collins, eds., *Representation and understanding.* New York: Academic Press 1975, 211-236.

Rumelhart, D. E., *Understanding and summarizing brief stories.* in: LaBerge, D. & S. J. Samuels, eds., 1977. *Basic processes in reading: Perception and comprehension.* Hillsdale, N. J.: Erlbaum 1977, 265-303.

Rumelhart, D. E., *On evaluating story grammars.* in: *Cognitive Science,* 4. 1980, 313-316.

Rumelhart, D. E. & D. A. Norman, *Representation in Memory,* University of California, San Diego 1983.

Rusch, G., *Verstehen verstehen —Ein Versuch aus Konstruktivistischer Sicht.* in: N. Luhmann & K. E. Schorr, Hrsg., *Verstehen zwischen Intransparenz und Verstehen.* Frankfurt/M. 1984.

Schank, R. C. & Abelson, R. P., *Scripts, plans, goals and understanding. An inquiry into human knowledge structures.* Hillsdale, N. J.: Erlbaum 1977.

Schank, R. C. & M. Lebowitz, *Levels of understanding in Computers and people.* in: *Poetiics* 9, 1980, 251-273.

Scheele, B. & N. Groeben, *Die Heidelberger Struktur—Lege—Technik (SLT), Eine Dialog-Konsens-Methode zur Erhebung subjektiver Theorien mittlerer Reichweite.* Weinheim & Basel: Beltz 1984.

Scheffer, B., *Literatur als Selbstkommunikation.* Habil. -Schrift, Uni Bielefeld 1985.

Schmidt, S. J., *Grundriß der Empirischen Literaturwissenschaft. Teilband 1: Der gesellschaftliche Handlungsbereich Literatur.* Braunschweig- Wiesbaden: Vieweg 1980 (Konzeption Empirische Literaturwissenschaft, Band 1).

Schmidt, S. J., *Text, Subjekt und Gesellschaft. Aspekte einer Konstruktivistischen Semantik.* in: M. Faust et al., Hrsg., *Allgemeine Sprachwissenschaft, Sprachtypologie und Textlinguistik. Festschrift für P. Hartmann,*

Tübingen: Narr. 1983, 55-71.

Schmidt, S. J., *Empirische Literaturwissenschaft in der Kritik.* in: *SPIEL. Siegener Periodicum zur Internationalen Empirischen Literaturwissenschaft,* 3, 1984, H. 2, 291-332.

Shimron, J., *Processes Behind the Comprehension of A Poetic Text.* in: *Instructional Science* 9, 1980, 43-66.

Smith, E. E., Shoben, E. J. & Rips, L. J., *Structure and process in semantic memory. A featural model for semantic decision. Psychological Review,* 1974, 81, 214-241.

Spiro, R. J., *Long-term comprehension: schema-based versus experiental and evaluative understanding.* in: *Poetics* 11, 1982, 72-86.

Stadler, M., Schwab, P. & Th. Wehner, *Kognition als Abbild und Plan des Handelns.* in: Ueckert, H. & D. Rhenius, Hrsg., *Komplexe menschliche Informationsverarbeitung,* Bern-Stuttgart-Wien: Huber 1979, 38-46.

Steinmetz, H., *On reflecting the social function of interpretation in the study of literature.* in: S. J. Schmidt (ed.), *Interpretation. Poetica* 12, 2-3, 1983, 151-164.

Tergan, S. -O., *Diagnose von Wissensstrukturen.* Tübingen: *Forschungsberichte DIFF,* Nr. 30, Oktober 1984.

Thorndyke, P. W. & F. Yekovich, *A critique of schema-based theories of human story memory.* in: *Poetics* 9, 1980, 23-49.

Viehoff, R., *Über einen Versuch, den Erwartungshorizont zeitgenössischer Literaturkritik empirisch zu objektivieren.* In: Groeben, N., Hrsg., *Literaturpsychologie,* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1976, 96-124. (= *LiLi. Zeitschrift für Literaturwissenscahft und Linguistik* 6, 1976, Heft 21).

Viehoff, R., *Literaturkritik im Rundfunk,* Tübingen: Niemeyer 1981.

Viehoff, R. & S. J. Schmidt, *Kommunikatbildungsprozeß. Empirische Untersuchungen zur Struktur und Funktion konventionsorientierten literarischen Wissens.* Antrag an die DFG für das Schwerpunktprogramm "Wissenspsychologie". Februar 1985. (MS)

Verdaasdonk, H., *Conceptions of literature as frames?* in: *Poetics* 11, 1982, 87-104.

Vipond, D. & R. A. Hunt, *point-driven understanding: pragmtic and cognitive dimensions of literary reading.* in: *Poetics* 13, 1984, 261-277.

Volpert, W., *Psychologische Handlungstheorie—Anmerkungen zu Stand und Perspektive.* in: Volpert, W., Hrsg., *Beiträge zur Psychologischen Hand-*

lungstheorie, Bern-Stuttgart-Wien, Huber 1980, 13–27.

Warren, W. H., Nicholas, D. W. & T. Trabasso, *Event Chains and Inferences in Understanding Narratives.* in: R. O. Freedle, ed., *New Directions in Discourse Processing,* Norwood, N. J.: Ablex 1979, 22–52.

Wienold, G., *Semiotik der Literatur.* Frankfurt/M.: Athenäum 1972.

Winogra.d, T. A., *Frame representation and the declarative procedural controversy.* in: Bobrow, D. G. & A. Collins eds., *Representation and understanding.* New York: Academic Press 1975, 185–210.

付記. 本稿 Siegfried J. Schmidt *Texte verstehen—Texte interpretieren* は後に *Perspektiven des Verstehens* (Hg. v. Achim Eschbach) Bochum, 1986 に収録された.